# カミュのターニングポイント — 1953 年 40 歳 —

松 本 陽 正

## はじめに

決定的な日というものがある。1654 年 11 月 23 日はパスカルにとって決定的な日となった。20 世紀に活躍した作家に目を向けても，1886 年のクリスマスはクローデルにとって，1892 年 10 月の「ジェノヴァの一夜」はヴァレリーにとって，運命的な一夜となる。

だが，決定的な年というのもあるようだ。

『夏』（1939 年から 1953 年までのエッセーを収録。1954 年刊。）までのカミュ作品を論じた研究書（『海と牢獄』初版）を上梓したロジェ・キーヨにあてて，1956 年 1 月 21 日カミュは次のような手紙を送っている。

> « Votre étude a toute raison de s'arrêter à l'Été, et à ma quarantième année, puisque, par un pur hasard d'ailleurs, ces dates coïncident évidemment avec une sorte de charnière de mon travail et de ma vie.» (I, 2037)

これまでさほど問題視されることはなかったが[1]，カミュは，このように，＜ 1953 年 40 歳＞が「仕事ならびに生活」の「転換点」となっているとの証言を残していたのであった。

では，どのような「転換点」となっているのだろうか？　生活面からみていこう。

私生活面では，1953 年夏[2]，妻フランシーヌが病に倒れたことがあげられる。この件については，ロットマンが次のように指摘していた。

> A l'été 1953, Francine Camus tomba malade. Ce dont elle souffrait n'était pas clairement définissable et, après un été long et éprouvant, son état empira au lieu

de s'améliorer. Désormais, Camus n'allait plus être que le témoin impuissant des troubles de sa femme. Il se sentait responsable et aurait voulu accomplir son devoir. Mais il semblait qu'il ne fût pas disposé à renoncer – pas plus à ce moment-là qu'à aucun autre – à l'existence qu'il menait et qui semblait constituer l'un des principaux motifs de ces troubles. Sa présence était indispensable, et en même temps aggravait tout; il n'y pouvait rien.[3)]

続いて，1981 年に刊行されたジャン・グルニエとの往復書簡は生々しくその一端を浮かびあがらせることになる[4)]。さらに，1996 年にはオリヴィエ・トッドがその著『アルベール・カミュ ある生涯』の中で 10 ページにわたって詳細に経緯を報告することとなる[5)]。トッドは，自殺未遂すら引き起こした，一年余にわたるフランシーヌの心の病が，カミュの心に大きな傷跡を残したことを明るみに出し，『転落』の身投げする女のモデルは他ならぬ妻フランシーヌだとしている[6)]。

カミュは深刻な執筆不能状態に陥る。

1954 年「12 月 1 ～ 3 日」の日付の打たれた『手帖』には次のような記述がみつかる。

Un an que je n'ai pas travaillé, que je n'ai pu travailler alors que dix sujets étaient là, dont je sais qu'ils sont exceptionnels, et que je ne pouvais aborder. Un an ces jours-ci, et je ne suis pas devenu fou. (*C3*, 138)

『手帖』にこのように認めているだけではない。親しい友に打ち明けてもいる。1954 年 7 月 13 日，カミュはキーヨに次のように告白する。

[...] il y a six mois, me dit-il, qu'il ne travaille pas. Il a eu de multiples ennuis : santé de sa femme, soins à donner à ses enfants et … (I, 2037)

このような執筆不能の時期だったにもかかわらず，仕事面でも「転換点」としている理由は一体何なのだろうか？以下，その点を検証していこう。

## 1.「喜びの源泉」の再発見

カミュは1953年が「転換点」だとしていたが，キーヨ宛の手紙で言及されている『夏』(1954) には，すでに記したように，1939年から1953年までのエッセーが収録されている。8つのエッセーが収められている『夏』の中で，「1953年」の日付が打たれているエッセーが2つある。「チパザに帰る」と「まぢかの海」とがそれにあたる。カミュの「転換点」という点で我々の関心を引くのは，アメリカ旅行の航海日誌に詩的想像力を加味した趣の「まぢかの海」ではなく，カミュにとって聖地ともいえるチパザ再訪時の思いを記した「チパザに帰る」である。

チパザ再訪によって，語り手は「港」«port» に帰ったような思いにとらわれる[7]。語り手は，自分にとって「喜びの源泉」« source de joie » とはチパザに他ならぬことを認識し，そして自らの内に「源泉」を維持する必要性，再出発の決意を次のように語っている。

> [...] je redécouvrais à Tipasa qu'il fallait garder intactes en soi une fraîcheur, une source de joie, aimer le jour qui échappe à l'injustice, et retourner au combat avec cette lumière conquise. Je retrouvais ici l'ancienne beauté, un ciel jeune, et je mesurais ma chance, comprenant enfin que dans les pires années de notre folie le souvenir de ce ciel ne m'avait jamais quitté. C'était lui qui pour finir m'avait empêché de désespérer. (II, 874)

1953年が「転換点」となっている理由，それは何よりもまず「喜びの源泉」の再発見の年だからに他ならない。下線を付した « re » で始まる二つの動詞 (« redécouvrais » « retrouvais ») は，そのことをよく示している。

この再訪時の印象は強烈だったようだ。『手帖』にはただ単に「チパザ。メモを参照のこと。」(*C3*, 69) と記されるだけで，メモを別にとっていることからもそのことがうかがえる。

ところで，「チパザに帰る」の末尾には「1953年」の日付が打たれているが，実際の再訪は1953年ではなく，1952年12月のことなのだ。1952年12月なら，

カミュは39歳ということになる。しかしながら，作品中では「40歳」とされているのである。

> Certes c'est une grande folie, et presque toujours châtiée, de revenir sur les lieux de sa jeunesse et de vouloir revivre à quarante ans ce qu'on a aimé ou dont on a fortement joui à vingt. (II, 869)

「40歳」という言葉は，「20歳」との対比のうえで，使われたのかもしれない。いずれにしても，カミュは「40歳」という言葉を使い，過去を «revivre» しようとするのである。以後，カミュは＜1953年40歳＞に強く拘泥するようになる。

**2.「源泉」への回帰**

1953年は「喜びの源泉」再発見の年であり，「源泉」認識の年である。だが，それと同時に，「源泉」への回帰決意の年ともなる。それ故，1953年はカミュにとってターニングポイントとなってくるのである。

『追放と王国』刊行の翌年にあたる1958年，長らく再刊を拒んできた処女作『裏と表』(1937) の再刊に応じ，カミュは序文を付け加えた。この中でカミュは『裏と表』こそが自らの「源泉」« source »(II, 6) であると断言し，いつの日か「自分の夢見ている作品」を，「いずれにせよ『裏と表』に似ていて，ある愛のかたちについて語る」(II, 12) 作品を書くだろうと述べ，自らの「源泉」へと回帰し，「『裏と表』を書き直す」(II, 13) 決意を表明する。ここでカミュが夢見ている作品が，『最初の人間』を指すことは衆目の一致するところとなっている。

ところで，カミュが「源泉」への回帰を表明したものとして名高いこの「『裏と表』再刊への序文」は一体いつ書かれたのだろうか？　ロジェ・キーヨは，「再刊への序文」の決定稿が正確にいつ書かれたかは不明だが，タイプ原稿を目にした1954年には完成していたとしている (II, p.1180参照)。2002年6月エクス＝アン＝プロヴァンスの「アルベール・カミュ資料センター」で調査した結果，残された4つのタイプ原稿からキーヨの言うように1954年にはほぼ完成していたことが確認できた。しかも，一番古いタイプ原稿には «Octobre 1953 » と日付が打たれ，そしてそれが消されて « 1954 » とされていたのである。つまり，「『裏

と表』再刊への序文」のタイプ原稿第一稿もまた，「転換点」たる1953年に書かれていたことが判明したのである。すなわち，1953年に「源泉」への回帰を決意し，『裏と表』の再刊に応じようとして「再刊への序文」をすでに書いていたのである。

### 3. ライフワークの着想

ところで，「再刊への序文」には，「『裏と表』を書き直す」決意が表明されていたが，なぜそのようなことが書けたのだろうか？　それはすでにこの時，『裏と表』の書き直しであり，カミュのライフワークともいえる『最初の人間』のタイトルと具体的構想の着想を得ていたからではないだろうか？

『最初の人間』のタイトルについては，1947年6月の『手帖』に初めて出てくる。

> Sans lendemain.
>
> 1re série. Absurde : *L'Etranger – Le Mythe de Sisyphe – Caligula et Le Malentendu.*
>
> 2e – Révolte : *La Peste (et annexes) – L'homme révolté* – Kaliayev.
>
> 3e – Le Jugement – Le premier homme.
>
> 4e – L'amour déchiré : Le Bûcher – De l'Amour – Le Séduisant.
>
> 5e – Création corrigée ou Le Système – grand roman + grande méditation + pièce injouable. (*C2*, 201)

だが，ロットマンによれば，「第三の系列―『審判』―『最初の人間』」なる記述はオリジナル原稿にはなく，カミュが出版のために手を入れたときに付け加えられたもの，とのことであった[8)]。

筆者自身，2002年にエクス＝アン＝プロヴァンスの「アルベール・カミュ資料センター」で資料調査した結果，ロットマンの言うとおり，1947年の『手帖』にこの記述がないことを確認した。つまり，「第三の系列―『審判』―『最初の人間』」は後から書き加えられたものだったのだ。では一体いつ書き加えられたのか？　換言すれば，一体いつ『最初の人間』なるタイトルが定まったのだろうか？　『手帖3』を手がかりに，以下その点を検証していこう。

残された遺稿（『最初の人間』）と同じ構成の覚書が初めて『手帖』に現れる

のは，1953 年である。

> Roman. 1re partie. Recherche d'un père ou le père inconnu. La pauvreté n'a pas de passé. «Le jour où dans le cimetière de province... X. découvrit que son père était mort plus jeune qu'il n'était lui-même à ce moment-là... que celui-ci qui était couché là était son cadet depuis 2 ans bien qu'il y eût 35 ans qu'il fût étendu là... Il s'aperçut qu'il ignorait tout de ce père et décida de le retrouver... »
>
> Naissance dans un déménagement.
>
> 2e partie. L'enfance (ou mêlée à la première partie) Qui suis-je ?
>
> 3e partie. L'éducation d'un homme. [...] (*C3*, 96-97)

すなわち，第一パラグラフにある，父の墓に参った折，父が自分より若くして死んだことを知り，愕然となって，自分がまったく知らなかった「父の探索」に向かう過程は遺稿の第一部第 2 章で述べられることとなるし，「貧しさは過去をもたない」との言葉は，『最初の人間』の第一部第 6 章で述べられる「貧者の記憶」の曖昧さと呼応している（*PH*, p.79 参照）。また，第二パラグラフ「引っ越しの最中での誕生」は第一部第 1 章で詳述されることとなる。

この覚書では「第二部。少年時代（.....）私は誰だろう？」となっているが，遺稿においても，主人公は「父の探索」から自己の少年時代の追想へ，すなわち自己の探索へと向かうことになる。

さらに「第三部。一人の人間の教育」という記述も，遺稿の，小学校でベルナール先生と出会い，奨学生試験に合格し，リセへと進学していく主人公の歩みと合致している。

このように，ここには，遺稿の構成とほぼ同じメモが記されているのである。さらに，この後には 2 つ連続して，『最初の人間』関係のメモが残されている。『最初の人間』へと発展するこれら 3 つの連続する断章の少し後に，具体的なプランとともに『最初の人間』*Le Premier Homme* というタイトルが，あの 1947 年の挿入されたプラン以降初めて出てくる。

> *Le Premier Homme.*

Plan ?

1) Recherche d'un père.

2) Enfance.

[...] (*Ibid.*, p.100)

大久保敏彦氏も指摘しているように[9]，『最初の人間』の意識的な形成は1953年のこの時と考えて間違いない。

マリア・カザレスは，1953年の「ある夜 — おそらくは10月17日土曜から18日日曜にかけて — 彼［カミュ］は寝つかれず，朝の4時に起きて，次の小説のテーマを考えた」[10]との証言を残しているが，この小説のテーマこそカミュが『手帖』に書き留めた『最初の人間』の具体的構想と考えて間違いないだろう。というのも，先ほど引用した『最初の人間』のタイトルと具体的な構想とが記されているのは『手帖3』の100ページだが，102ページに「53年10月」の日付が打たれているからである。続いて，103ページにも，「10月」の日付を付して，『時事論集』第二巻の出版によって，『反抗的人間』(1951) 刊行以来の論戦に終止符を打ち，「創造」« création » へと向かおうとする決意が認められている。

Octobre 53. Publication d'Actuelles II. L'inventaire est terminé – le commentaire et la polémique. Désormais, la création. (*C3*, 103)

「創造」« création » と記すとき，カミュの念頭にあったのは，『最初の人間』と考えて間違いあるまい。

「喜びの源泉」の再発見，「源泉」への回帰の必要性の認識，そして「源泉」に回帰しようとしたライフワークのタイトルと具体的構想の着想[11]..... こうしたものを得た年であるがゆえに，＜1953年40歳＞は，カミュにとって決定的なターニングポイントとなっているのである[12]。

## 4.『手帖』の手直し

1947年6月の『手帖』にある「第三の系列—『審判』—『最初の人間』」なる記述は，カミュが出版のために手を入れたときに付け加えたものだった。で

はこの記述は一体いつ挿入されたのだろうか？

ここで一つの仮説を提示したい。

カミュは生前，『手帖』の出版に同意し，第7ノート（1951年3月から1954年7月まで）までをタイプ化させている[13]。タイプ化させる前に，カミュが『手帖』を読み返したのは間違いない。問題の「第三の系列—『審判』—『最初の人間』」の挿入もおそらくこの時なされたと考えられるのだが，タイプ化された原稿をカミュがキーヨに渡したのは，1954年である（*JV*, p.7参照）。だとすれば，この挿入もまた1953年になされたのではないだろうか？

単なる挿入ばかりではない。ロットマンが指摘するように[14]，とりわけ「第一ノート」は配列を大幅に変えている。これは，筆者自身，「アルベール・カミュ資料センター」で確認したことだが，「第一ノート」の冒頭を飾る，創作への決意を記した有名な長い断章は，オリジナルノートの冒頭にはない。『手帖』の出版に同意し，タイプ化させる前にカミュが配列を変更した結果，冒頭に据えられたものに他ならない。

出版されている『手帖』の冒頭部は実にかっこいいものだ。

> *Mai 35.*
>
> Ce que je veux dire :
>
> Qu'on peut avoir – sans romantisme – la nostalgie d'une pauvreté perdue. Une certaine somme d'année vécues misérablement suffisent à construire une sensibilité. Dans ce cas particulier, le sentiment bizarre que le fils porte à sa mère constitue *toute sa sensibilité*. [...]
>
> A mauvaise conscience, aveu nécessaire. L'œuvre est un aveu, il me faut témoigner. Je n'ai qu'une chose à dire, à bien voir. C'est dans cette vie de pauvreté, parmi ces gens humbles ou vaniteux, que j'ai le plus sûrement touché ce qui me paraît le sens vrai de la vie. Les œuvres d'art n'y suffiront jamais. L'art n'est pas tout pour moi. (*C1*, 15-16)

『手帖』の最初のページにこのように作品創造への決意を認め，そしてカミュは処女作『裏と表』の執筆へと向かっていったと考えられていたのだが，実は

そうではなかったのだ。後で配列が変更されたものだったのだ。

だが，なぜそのようなことをしたのだろう？「源泉」となる『裏と表』— 厳密に言えば「肯定と否定との合間」— の着想と同時に『手帖』を認め始めたと思わそうとの作家の見栄なのだろうか？　それもあるかもしれない。だが，『手帖』出版を機に，その冒頭に「肯定と否定との合間」の構想メモを配することで，「源泉」への回帰の意思と決意とを刻印しようとしたのではないだろうか？　再出発への決心を自分自身のためにこのようなかたちで残そうとしたのではないだろうか？

## 5. ＜1953 年 40 歳＞への拘泥

冒頭部にあげたキーヨへの手紙に，＜1953 年 40 歳＞が「転換点」となったのは「もっとも単なる偶然なのですが」とあった。たしかに，1952 年までのカミュにはこの日付は特別な意味をもってはいなかった。

だが，1953 年以降，カミュは＜1953 年 40 歳＞という日付に拘泥するようになる。

先にみた，エッセー「チパザに帰る」を生み出したチパザ再訪は，実際は 1952 年 12 月，カミュ 39 歳のことだった。しかし，1953 年に完成する原稿では，「40 歳」と設定されてくるのであった[15]。

＜1953 年 40 歳＞へのカミュの拘泥は，彼のライフワークとも言える未完の小説『最初の人間』に強く現れている。

『最初の人間』は，カミュにあっては珍しく，「日付型」の小説となっている。主人公ジャックの誕生を描いた第一部第 1 章には「1913 年秋のある夜」« une nuit de l'automne 1913 »(*PH*, 14) との指標がある。続く第 2 章は，「40 年後」« Quarante ans plus tard »(*PH*, 25) という言葉で始まっており，語り手の現在に「1953 年」と日付を打つことが可能となっている。以後，物語は，＜1953 年 40 歳＞の主人公ジャック・コルムリが過去を追想するかたちで展開していく。そして，未完に終ったものの，作品は「一人の男の 40 年にわたる生涯」[16] を描くはずであった。このような設定に，＜1953 年 40 歳＞という，「源泉」への回帰を決意し，『最初の人間』のタイトルと具体的構想を得た年へのカミュの強い拘りが見てとれよう。

ところで，残された遺稿『最初の人間』は，きわめて自伝的色彩が強く，カミュの伝記的事実と符合する言及が数多く見出される。たとえば，主人公ジャック・コルムリとカミュの誕生の年 (1913) は一致しているし，また第一次世界大戦宣戦布告とほぼ時を同じくして，ベルクールの祖母の元に身を寄せる主人公の一家，そしてそこでの生活はカミュ自身が体験したものと思われる。すでにあげた『最初の人間』のプランに「第二部。少年時代。(……) 私は誰だろう？」とあったが，『最初の人間』においてカミュが「父の探索」から出発して，自らの過去の探求へと向かったことは間違いない。遺稿の構成とほぼ同じ章題が打たれた，巻末に付された「紙片Ⅲ」には，遺稿の「学校」に相当する章題が「ジェルマン先生と学校」(*PH*, 270) となっており，自らの過去をそのまま作品化しようとしていたカミュの意図がそこに読みとれる。それゆえ，推敲がほとんどなされなかったこの遺稿には，主人公の母をつい「カミュ未亡人」(*PH*, 189) と言ったり，ベルナール先生を「ジェルマン先生」(*PH*, 138) としたり，一人称が顔を覗かせたりしている場面 (*PH*, p.110, p.181 参照) が残っているのである。また，作中にいくつか見つかる疑問符「？」の意味もその点に求められよう。たとえば，「湾岸労働者の事故？　新聞を見ること」« Accident du docker? Voir journal. » (*PH*, 249) という欄外の加筆があるが，ここには事実を再現しようとする態度がよく現れている。また，「ある隣人（？）が，カミュ未亡人という署名を手本にしてなぞることを母に教えた」« [...] un voisin (?) lui [=à leur mère] avait appris à recopier le modèle d'une signature Vve Camus [...] » (*PH*, 189) という文もあるが，「隣人」の後のこの疑問符は何を意味するのだろうか？　完全な虚構，小説なら，疑問符のないままで，このコンテクストでは十分である。母に署名方法を教えたのがはたして隣人だったのかどうかもはや分らぬ記憶の曖昧さを示すこの疑問符は，同時に，事実の再現を目指すカミュの態度をよく示してはいないだろうか？　さらには，過去を回想した語り手が，真実を語ったとの思いを吐露している文もある。

> Oh! oui, c'était ainsi, la vie de cet enfant avait été ainsi, la vie avait été ainsi dans l'île pauvre du quartier [...] (*PH*, 255)

語り手は自らが語った過去の真実性をこのように証言しているのである。このような『最初の人間』を評して，「カミュの『告白』」と言い切る記事も刊行直後に現れている[17]。簡単な説明にとどめたが，枚挙にいとまがない程の自伝的要素の多さから，この未完の遺稿は，「<直接的な>小説，つまりこれまでのように計算された神話の類とは違う小説」[18]であり，カミュ自身の自伝的世界の再現といっても過言ではない側面をもっている[19]。

ところで，伝記的事実との関連で，一つの日付が我々の興味を引く。それは，カミュ 40 歳にあたる，1953 年である。作品の中で，主人公ジャック・コルムリは，父の墓参を 40 歳で行う設定になっているのだが，しかしながら，実際にカミュが，サン＝ブリウーで父の墓参りをしたのは，1953 年ではなく，1947 年夏のことなのである[20]。カミュ自身の伝記的世界の再構成といっても過言ではない『最初の人間』に例外的に見受けられるこの伝記的事実のすりかえに，あくまでも< 1953 年 40 歳>を「転換点」として捉えようとし続けたカミュの意識がはっきりと見てとれるのである。

## 結論にかえて

『反抗的人間』によって引き起こされた一連の論争，とりわけサルトルとの論争 (1952) で深い傷を負ったカミュは，体調不良，妻の病気も手伝い，クリエイティヴな活動が不能な状態，いわゆる「失意の時代」へと入ったとされている。真の創造ができなくなり，それを埋めるべく 1953 年以降，カミュは「避難場所」« refuge »[21]を求めるかのように，翻案活動に入っていく。1953 年からその死に至るまでの間，真の「創造」« création » といえるのは，『転落』と『追放と王国』だけである。だがそれとても『最初の人間』が中核をなすはずだった「第三の系列」への移行期の作品にすぎない[22]。

だが，源泉への回帰を決意した年をカミュは忘れようとはしなかった。メモリアルな年，再出発を決意した年を忘れぬため，< 1953 年 40 歳>にカミュは拘泥し続けた。

それがいかに強烈な年であったかは，『最初の人間』のタイトルが以後 6 年間 (1953-59) 変ることがなかったことからも見てとれる。カミュが作品のタイトルを 6 年間も変えなかった例は他にない。

『反抗的人間』によって引き起こされた論争以降の歳月を「失意の時代」と短絡的に捉えるのではなく，1953 年を新たな再出発の年とし，以後の長い歳月を，創作意欲が地下水脈のように流れ続ける，長い胎動期間と肯定的に捉え直し，政治的な発言等も含め，晩年のカミュおよび彼の作品を見直さなくてはならないのではないか。そこから新たなカミュ像が浮かびあがってくるのではないか。ライフワークの執筆，「源泉」への回帰を決意した＜1953 年 40 歳＞へのカミュの強い拘りから，そのように思う。

## 注

アルベール・カミュの以下の諸作品を次のように略記し，ページは括弧内に直接示す。

I : *Théâtre, récits, nouvelles*, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 1967.

II : *Essais*, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 1965.

*PH* : *Le Premier Homme*, Gallimard, « Cahiers Albert Camus 7 », 1994.

*C1* : *Carnets I mai 1935 – février 1942*, Gallimard, 1962.

*C2* : *Carnets II janvier 1942 – mars 1951*, Gallimard, 1964.

*C3* : *Carnets III mars 1951 – décembre 1959*, Gallimard, 1989.

*JV* : Journaux de voyage, Gallimard, 1978.

なお，引用文中の下線は松本による。また，邦訳のあるものについてはそれを参照させていただいたことをお断りしておく。

1) 浩瀚なカミュの伝記を著したロットマンは，第四部のタイトルを「40 歳」« Quarante ans » としている。Herbert R. LOTTMAN, *Albert Camus*, Traduit de l'américain par Marianne VERON, Seuil, 1978.

2) オリヴィエ・トッドによれば，秋のことである。Olivier TODD, *Albert Camus une vie*, Gallimard, 1996, pp.584-585 参照。

3) Herbert R. LOTTMAN, *op.cit.*, p.536.

4) *Correspondance Albert Camus – Jean Grenier 1932-1960*, Gallimard, 1981, pp.190-193 参照。

5) Olivier TODD, *op. cit.*, pp.584-594 参照。

[6] Olivier TODD, *op. cit.*, pp.637-638 参照。カミュ自身，フランシーヌが激しい精神不安定に陥った日付（12 月 28 日）を，4 年後も忘れてはいない。*C3*, p.215 参照。

[7] « Il me semblait que j'étais enfin revenu au port, pour un instant au moins, et que cet instant désormais n'en finirait plus. » (II, 873)

[8] « Plus tard, en remaniant son journal pour publication, Camus inséra une nouvelle série entre la seconde et la troisième : « Le jugement » et *le Premier Homme*, donnant ainsi l'impression de les avoir prévus dès l'été 1947, alors qu'il s'agissait en vérité de conceptions ultérieures; » (Herbert R. LOTTMAN, *op.cit.*, p.439.)

[9] アルベール・カミュ，大久保敏彦訳，『最初の人間』，「訳者あとがき」，新潮社，1996，p.321 参照。

[10] Herbert R. LOTTMAN, *op.cit.*, p.538.

[11] 翻案劇の中で最も重要な『悪霊』の翻案を思い立ったのも 1953 年である。ロジェ・キーヨの « Présentation »(I, 1885) 参照。

[12] カミュは「40 歳」に拘っているが，しかしながら，カミュの生まれたのは，1913 年 11 月 7 日であり，厳密に言えば，『最初の人間』のタイトルと具体的構想をカミュが得たのは，40 歳になる直前のことではある。

[13] *C3*, p.7 の「編者の注」参照。『手帖 1 』の編者によれば，『手帖』のタイプ化は 1953 年まで，とのことであった。*C1*, p.7 参照。

[14] Herbert R. LOTTMAN, *op.cit.*, p.99 参照。

[15] 『最初の人間』への序曲ともいうべき『追放と王国』所収の「口をつぐむ人々」の主人公イヴァールを 40 歳と設定しているのは，単なる偶然ではないように思われる（I, p.1597 参照。）

[16] Herbert R. LOTTMAN, *op. cit.*, p.668.

[17] Pierre ENCKELL, « Enfin, les « Confessions » d'Albert Camus ! », *L'Événement du jeudi*, 7 au 13 avril 1994.

[18] *Correspondance Albert Camus – Jean Grenier 1932-1960*, *op. cit.*, p.201.

[19] もちろん，虚構化の操作もほどこされている。虚構化の操作は，なによりも，三人称小説の形をとり，主人公の名をジャック・コルムリとした点に認められるだろうし，聖書の世界を髣髴させる冒頭の誕生の場面も純然たる想像の

産物である。

[20] Herbert R. LOTTMAN, *op. cit.*, p.440 参照。

[21] Roger GRENIER, *Album Camus*, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 1982, p.222.

[22] 1954 年 3 月，フランク・ジョットランのインタビューに答えて，カミュは『追放と王国』を「移行過程のようなもの」« une transition » と位置づけている。Franck JOTTERAND, « Entretien avec Albert Camus », *la Gazette de Lausanne*, 27-28 mars, 1954, p.9 参照。なお，この問題については，拙稿「『追放と王国』にみられる *Le Premier Homme* の影」，『広島大学フランス文学研究 15』，広島大学フランス文学研究会，1996, pp.33-34 を参照されたい。

# Année 1953 : Camus – 40 ans – , le tournant décisif

Yosei MATSUMOTO

Camus a confié à Roger Quilliot que l'année 1953, celle de ses quarante ans, constituait une sorte de charnière dans son travail et dans sa vie. A son propre état de santé chancelant vient s'ajouter, cet automne-là, la maladie de sa femme Francine, ce qui le rend incapable de travailler. Malgré cet état d'impuissance, pourquoi Camus considère-t-il l'année 1953 comme « une sorte de charnière dans [s]on travail » ?

Cette date coïncide, d'une part, avec celle de la redécouverte d' « une source de joie », qu'il dépeint dans *Retour à Tipasa*, daté de 1953 : il ressent la nécéssité de garder intacte sa source.

D'autre part, la consultation des manuscrits de la préface à la réédition de *L'Envers et l'endroit*, sa première œuvre, révèle qu'a été écrit en 1953 le premier état dactylographié de la préface qui annonce la décision de l'écrivain de retourner à « la source » et de « récrire *L'Envert et l'endroit* », qui ne sera autre que *Le Premier Homme*.

La révision de ses *Carnets* atteste en vérité, que cette date coïncide également avec la première conception concrète de *Le Premier Homme*, œuvre de toute la vie de Camus.

Ainsi, l'année 1953 est-elle marquée d'une pierre blanche et immuable. Désormais Camus s'attachera obstinément à cette date.

Dans *Le Premier Homme*, à partir du deuxième chapitre, le présent du narrateur se situe en effet en 1953 et l'intrigue porte essentiellemnt sur un rappel du passé du protagoniste Jacques Cormery, âgé de quarante ans. Qui plus est, dans cet ouvrage autobiographique, Jacques se rend sur la tombe de son père en 1953, à l' âge de quarante ans. Cependant, en réalité ce n'est pas en 1953 mais à l'été 1947 que Camus se rendit à Saint-Brieuc sur la tombe de son père. Cette modification voulue d'un fait biographique ne peut que traduire l'insistance de l'auteur qui considère l'âge de quarante ans comme un tournant décisif dans sa carrière d'écrivain.